



TITLE:

ゴットルに於ける經濟と社會

AUTHOR(S):

杉原, 四郎

CITATION:

杉原, 四郎. ゴットルに於ける經濟と社會. 經濟論叢 1943, 57(4): 368-385

ISSUE DATE:

1943-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/132034>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號四第卷七十五第

統制經濟の諸概念……………高田保馬

ベッティの政治算術論……………白杉庄一郎

コンツェルンに關する覚え書……………靜田均

中小工業と問屋の機能……………田杉競

ゴットルに於ける經濟と社會……………杉原四郎

彙報

行發月十年八十和昭

ゴットルに於ける經濟と社會

杉原四郎

一 序

言

ゴットルの經濟本質觀の最も大きな特徴は、經濟を「欲求と充足との持續的調和」といふ精神に於ての人間共同生活の一つの部分構成として把握するところに在る。即ちゴットルによれば、人間共同生活は、三つの基本關係に従つて、ゲマインシャフトへの根本的構成、マハトシャフトへの附加的構成、ヴィルトシャフトへの終結的構成と、夫々別箇の精神に於て三たび構成されるのであつて、經濟はその終結的構成として、他の二つの部分構成と密接な關聯に於てとらへられてゐるのである。換言すれば、ゴットルの經濟本質觀は人間共同生活に關する全體的且根本的考察をその基礎に有し、それによつて經濟が人間共同生活に對して持つところの意義と課題を明らかにせんとするのである。我國に於けるゴットル研究者によつて、その經濟本質論が高く評價されてゐるのも、その本質觀がかくの如き特質を具へたものであるからに外ならない。

しかるに他面ゴットルの經濟本質論に對する批判も亦まさに此の點に胚胎するのである。即ち例へば、ゴットルの説く三つの部分構成のうち、前二者は主體—主體の關係であり、後者は主體—客體—主體の關係であるが、此の様な全く異質的な三つのものをゴットルの如く併列的にとりあつかふ事は果して妥當であらうかといふ批判

- 1) 宮田喜代藏博士著、「貨幣の生活理論」52頁以下、酒井正三郎博士著、「國民經濟構造變動論」27頁以下、板垣與一教授著、「政治經濟學の方法」217頁以下
- 2) 福井孝治教授著、「經濟と社會」116頁以下。

や、ゴットルの説く經濟への構成は、そのうちに勝義の主體—主體の關係を含んでゐないのではないか、従つてその經濟本質論は經濟を人間共同生活の部分構成として説くに未だ不充分的ではないかといふ批判である。この様な批判に對して、われわれはゴットルに於てかの三つの部分構成は如何なる根本的關聯に於てあるか、又經濟内部に於ける社會關係は如何なる本質的構造を持つてゐるか、といふ疑問を抱かざるを得ないであらう。

かくの如きゴットル解釋乃至批判に關する學界の現状に鑑みると、我々はゴットルの經濟本質論に關する最も重大な問題が、經濟と社會との關係に存在する事に氣付かしめられるであらう。本稿はかかる問題についてのゴットルの所説を吟味し、以て上述の如き疑問に答へようとするのである。

二 經濟と社會との關係

(1) 三つの基本關係　ゴットルによれば、共同生活に於ける三つの部分構成は、共同生活を根本的に支配する三つの基本關係(Grundbeziehung)によつてその成立の刺激を與へられる。従つてわれわれは先づこの基本關係に關するゴットルの所説を伺ふ事にする。

人間共同生活には社會的な二つの根本關係(Grundlegende Beziehungen)が存する。即ち主體—主體の關係と、主體—客體—主體の關係とが之である。ところで、運命世界に於て意欲が全能的な役割を果すといふ事は、此の世界に於ける主體と客體との不可避的な對立と共に運命世界の最も根本的な特性であつて、此の世界に於けるあらゆるものが意欲と關聯をもつのであるから、主體—主體の關係は之を意欲と意欲との關係と解して差支へない。しかるに意欲と意欲との間の關係には、共同生活を根本的に支配するところの、究極的に對立する二つの基本關

3) 酒枝義典教授著、『構成體論的經濟學』26頁以下。

4) Gottl; Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. 1936, S. 150, 邦譯 210-211頁。

5) Gottl; Wirtschaft und Wissenschaft. 1931, S. 1303.

係として、生の親和 (Lebensneigung) と生の不和 (Lebenswiderstand) とが存在する。前者は意欲と意欲との内面的無條件的な一致であり、後者は意欲と意欲との妥協を許さぬ絶對的對立である。

もとより現實に於ける意欲と意欲との關係が常に純粹なこの二つの關係に限られるのでは決してない。例へば現實には、意欲の寛恕 (Duldsamkeit) に伴ふところの行爲に於ける平板な並存關係 (Nebeneinander) や、一定の目的の爲の意欲の協力によつて生ずるところの行爲に於ける共存關係 (Miteinander) や、一定の目的の爲の意欲の競争によつて生ずるところの和解せぬ近接關係 (Beieinander) 等が存するが、いづれも共同生活をその根本から支離する基本關係とは云はれない。協力を持続的形式にもたらし或は競争を制御する協定や契約の如きは、即ち共同生活の部分的な構成 (ein teilweises Gestalten) であり得ても、未だそれはかのゲマインシャフトやマハトシャフトへの構成の如き、共同生活の部分構成 (eine Teilgestaltung) ではない。けだしそれは「唯場合場合に應じて」成立するにすぎず、又「それ自身支持を必要とする」ものであつて、歴史的にも最も原初的なもの (das gewas Uraufganges) ではないのであるから。従つてゴットルは、契約の成果としての「ゲゼルシャフト」を、共同生活の類廢の全く特定なる形式であると把握するのであつて、之を共同生活の一つの基本構成たるゲマインシャフトと組合せ、二つの基礎的なものとする見解に反對する。後述する如く、ゴットルにあつてはゲマインシャフトに組合さるべきものはマハトシャフトである。

次に第二の社會的根本關係としての主體—客體—主體の關係は、先づ之を意欲と意欲の關係について見れば、生の親和及び生の不和の二つの基本關係に分解せしめられる。しかるに此の第二の根本關係の背後には、更に共同生活に於ける第三の基本關係としての生の困窮 (Lebensnot) が伏在する。生の困窮とは意欲の無限性と可能性の有限性に基く兩者の根本的不一致であるが、この基本關係は唯に主體—客體—主體の三角關係の背後に存在するのみならず單なる主體—客體の關係の背後にも存在するのであつて、ここにかの「相對的に最少の費用をもつて行爲せよ」と命ずる技術的理性の發生する地盤が存する。「素朴な理論」は往々にしてこの技術的理性と經濟的理性を混同して、經濟を技術的節約、即ち手段に於ける、欲求充足の諸可能性に於ける節約と同視し、經濟を單なる欲望滿足の爲の作能 (Leistung) として把握するに至る。しかるに之等主體—客體の關係は決して社會的なもの

6) Volk, Staat; Wirtschaft und Recht. S. 153 ff. 邦譯 216頁以下。

7) Ibid., S. 156, 邦譯 220頁。

8) Wirtschaft und Wissenschaft, S. 1308 ff.

のではないから、單なる主體—客體の關係に則して把握された經濟と人間共同生活との間には何等本質的なものは存しない。人間共同生活の部分構成たる經濟への刺激となりうる基本關係は、從つて主體—客體の背後に存する生の困窮ではなく、主體—客體—主體の背後にあるそれではないであらう。しかるに後述する如く、かゝる意味に於ける生の困窮がそれとして發見され、經濟への構成が成立するのは、既に主體—主體の關係に則してゲマインシャフトへの構成及びマハトシャフトへの構成が成立してゐる事を前提とするのである。

扱へてここに見出された三つの基本關係は人間共同生活の構成にとつて如何なる意味を持つか。構成とは云ふ迄もなく體驗される生起の持續と存立への統合であつて、最も深き意味に於いて平和への秩序に外ならないから、それはまづ以て生の親和なる關係によつて自らを基礎付けん事を求めると同時に、生の不和及び生の困窮を防止せん事を努めなければならぬ。¹⁰⁾人間共同生活の三つの部分構成は、それらの立場に於てこの様な根本問題を解決せんとする事を使命とするのである。

(ロ) 社會の成立 生の親和は共同生活への構成一般に對する刺激として、かの三つの基本關係のうちでも絶對の優位を占めてゐる。此の生の親和の基礎をなすものは、撰擇意志(wählendes Wollen)に基く理性的な外面的一致ではなく、衝動意志(stossendes Wollen)に基く感情的な内面的一致であり、その場その場の共存關係(Mitsein)ではなく、持續的な一體關係(Füreinander)である。此の場合かくの如き關係に於てある主體は、血縁を持つ群として、自然そのもの手から共同生活に與へられてゐるのであつて、その最古の形式は母系氏族である。この群のある事によつて生活親和は直ちに内面的一致の精神をもつた構成への刺激を與へるので、此處では生活への構成は全く自然的に出來上る。この生の親和を本源的に創立する衝動意志をゲマインシャフトへの意志、内面

9) Ibid., S. 1307.

10) Ibid., S. 1311.

11) Ibid., S. 1314, ff. 尙、ゴットルは後に至つて、Gemeinung の代りに Gemeinschaftsgebilde といふ名稱を用ひてゐる。

的一致の精神に於けるこの人間共同生活の自然的前構成 (Blindwandelnde Vorgestaltung) をゲマインシャフトへの構成、ゲマインシャフトへの意志によつてその構成が基礎付けられてゐるところの構成體をゲマイヌンク (Gemeinung)、ゲヌマイヌンクの必然的附屬物としての群を我々群 (Wirgruppe) と名付ける。¹¹⁾

人間共同生活は、如何にそれが原始的狀態から遠ざからうとも、決してこの第一段階の部分構成から解放される事は出来ない。この意味に於てゲマインシャフトへの構成は人間共同生活にとつて前構成たると同時に根本構成 (Grundgestaltung) だと云はるべきであつて、あらゆる社會は最も深き基礎をゲマインシャフトに持つのである。

一つの社會的構成體は、それが如何なる精神に於て構成されて居ようとも、同時にゲマイヌンクでもあるのであるければ、それは自らの魂 (Seele) を持つ事が出来ない。従つて如何なる構成體も眞に持續と存立への構成的保證を確固たらしめんが爲に、絶えずゲマイヌンクへと深まりゆき、その基礎を鞏固にせんと努力するのである。ゲマイヌンクの最高のものとして民族共同體がある。

ゲマイヌンクはその本質上排他的であつて、それは自己の内部に於ては生の親和を保持するとしても、他のゲマイヌンクとの間におのづから生の不和を惹起せしめる。¹²⁾ 生の不和の中では權力の爲の不和と困窮に依る不和が特に著しい。¹³⁾ かくの如き生の不和を克服する爲には、ゲマインシャフトへの構成とは異なる構成、即ち排他的ではなく包括的 (inklusiv) な、又感情的自然發生的でなく理性的人爲的な構成が行はなければならないのである。¹⁴⁾

かくの如き構成は如何にして行はれるであらうか。ゲマイヌンクの内部的闘争ならばともかく、ゲマイヌンク相互の間の闘争が、單純に好意的協定で解消するとか、或は古代に於て既に契約が平和的解決を齎し得たといふ想定は完全に事實に反する。契約や交換は骨の折れる成立過程を辿つて成熟する創造的概念であつて、之を生

12) Ibid., S. 1318.

13) Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. S. 164. 邦譯 231頁。

14) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 1319.

15) Ibid., S. 1321.

不和の始源的な解決法だと考へるのは、「近視眼的な主知主義」の見解と云はなければならぬ。意欲對意欲の衝突を始源的且常時的に克服し得るものは、争ひ合ふ意欲を制御せんと意圖する第三の優勢な意欲の干涉のみである。¹⁶⁾即ち第三の優勢な意欲が權力を以て強制的に鬭争を調整し、人爲的に平和を打ちたてるのである。權力の把持が一構成體の内部に於て構成的に保證されるときそれは支配と呼ばれ、當該構成體の群は支配者層と被支配者層に分れる。それはもはや内面的の一致に基く我々群ではなく構成的に結合された結合群 (Verbandsgruppe) である。

「權力の把持」を核心とし、その權力の及ぶ範圍を限界とするかくの如き第二の構成は、前述の如く内包的なる事をその特徴とした。即ちこの構成によつて生ずる構成體は多くのゲマイヌンクをその在內構成體として内に含む包括構成體として成立する。¹⁶⁾然して此の構成の背後にあつて統一的に活動してゐる意志をマハトシャフトへの意志、此の意志によつて構成されてゐる構成體をゲゼルンクと呼ぶ。¹⁷⁾ゲゼルンクは權力をその核心とするであるが、欲するがまゝに權力が行使されるのは個々の場合に限られるのであつて、權力が支配として自己を主張せんとする場合には、意欲に活動の餘地即ち自由を與へる事なしには之を眞に制御する事は出来ない。即ち強制と自由とが何時も正しい關係に置かれてゐる事が必要である。従つてゲゼルンクは、對内的且外向的に支配する權力によつて、強制と自由との持續的調和の精神を規準として構成されなければならないのである。¹⁸⁾

ゲマインシャフトへの構成が既にマハトシャフトへの構成と結合し、従つてゲゼルンクが多くのゲマイヌンクの上に構築されて、始源的な構成に緊密な組織を與へるならば、社會 (Gesellschaft) はもはや單なる芽胞狀態に於て存在するものではなく、それはすでに全き姿に於て實在する。構成的活動が生との不和を制御する程度に應じて平和への秩序が創造されるのであつて、この意味に於てマハトシャフトへの構成は社會の實現に決定的な役割

16) Ibid., S. 1325.

17) ゴツトルは後に至つて Gesellung の代りに Machtschaftsgebilde といふ名稱を用ひてゐる。

18) Ibid., S. 1327.

を有するのである。¹⁹⁾ 共同生活にとつて生の不和の克服は焦眉の急の問題であるから、此の第二の構成は早刻 (ungestäumt)²⁰⁾ 第一の前構成につけ加はる。マハトシャフトへの構成の最高構成體が國家である。

(ハ) 經濟への構成　ゲマインシャフトへの構成にマハトシャフトへの構成が即刻附け加はる事によつて既に社會に於ける生活が、従つて社會構成體が成立した。共同生活の第三の終結的構成たる經濟への構成は、しかし早刻之に加はるわけではない。さうする事は不可能であり又不必要である。

即ち第一に、意欲と可能との乖離を個々の場合に於て見出す事は、實踐的行動者にとつて決して困難ではなく、従つてそこから技術が発生するも容易であらうが、しかし此の困窮狀態が人間共同生活を根本的に支配してゐる一つの基本關係であつて、之を克服する爲には、技術に依る局部的解決だけではなく、之を統合して生の困窮と徹底的に對決する一つの秩序を樹立しなければならぬといふ事、即ち生の困窮が共同生活の部分構成への刺激として感じられるといふ事は、原始人にとつては決して容易な事ではないのであり、第二に、生の困窮は事實上最古の時代から共同生活を脅かして來たが、原始人は通常惹かれた自然的環境に住んでゐるから、その脅しは破壊的に作用するに至らず生の不和を惹起する事を通じて間接に作用するのであるが、生の不和に對してはマハトシャフトへの構成がその克服に當つてゐるのであるから、原始人は生の困窮を抜本的に克服する秩序を持たずとも一應その生活——それは未だ主張されるものではなく生きながらへてゐるにすぎないと云はるべきものであるとしても——を續ける事が出來たのである。

意欲と可能の間のかの永遠の乖離が共同生活の基本關係たる生の困窮として發見される爲には、社會的構成體の成員がその場の缺乏や臨機の困窮狀態を意識するのではなくて、當該構成體の持つすべての意欲とすべての可能とが見渡された上で両者が根本的に不一致の状態にある事が意識される事を要する。しかるに瞬間的な希求 (Begierden) に支配され、絶えず移り氣な奔走にかまけてゐる原始人に此の様な能力を期待する事は出來ない。もとより原始人と雖も、かの「素朴な理論」が主張する如く、個人的な希求或はそれから成長して第二の天

19) Ibid., S. 1328.

20) Gottl.; Wirtschaftspolitik und Theorie. 1939, S. 64.

21) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 1334-1335. Wirtschaftspolitik und Theorie. S. 69.

性となつた欲望 (Bedürfnis) のみしか知らないのでは決してない。彼は同時に對内的秩序の維持や對外防衛の爲の共同生活そのものの必要から生ずる希求や、或は技術的な希求についても既に知つてゐるのである。しかしそれが由來する希求が感情的なものであれ理性的乃至悟性的なものであれ、ともかくこれらすべての意欲されたものを一貫して存在する一つの事實を精神的に摘出し、それによつて多種多様の意欲されたものを一の共通分母にもたらしといふ事が彼等には缺けてゐる。かくの如き精神化された意欲を一つの全體としてあらゆる可能と對置せしめる事によつて直線的思考は圓環的思考に進化する事が出来るのである。ところでこの事實とは、如何なる實踐的意欲も、その意欲の満足を約束するすべてのものを支配下に置かんとする要求をみづから發するといふ事である。この要求を欲求 (Bedarf) と呼ぶならば、欲求といふ共通分母によつて、多種多様の意欲がはじめて當該構成體の欲求にまで精神的に統合される事になる。此の欲求に對し、すべての可能は充足を保證する支配可能性として對置される。然して意欲と可能との根本的乖離は今や欲求と充足とのそれとして考へられ、社會的構成體を生ゐの図窮から根本的に防禦せんとする新しい第三の附加的構成——これすなはち、欲求と充足との持續的調和の精神に於ける經濟への構成に外ならない——が成立するのである。

前述の如くゲマインシャフトへの構成にマハドシャフトへの構成が附加される事によつて、社會的構成體は既に包括構成體と在內構成體とに展開されてゐた。今前者を共同體 (Gemeinwesen)、後者を家 (Hauswesen) と呼ぶならば、經濟への構成の前提としての欲求に於ける思惟は、多數の家に於て始まつたのではなく、先づ以て共同體に於て、而もそのゲゼルンクに則して成長して行くのである。²²⁾ 即ち、權力の把持は、構成的に保證されて支配となり、ゲマインシャフト政策及びマハトシャフト政策を行ふ事によつて共同體を構成してゆくのであるが、やが

て共同體は、マハトシャフトの爲に、特にその權力の基礎付けの爲に、欲求に於ける思惟を問題とせざるを得ない。けれど社會的構成體の生活が、自然の恩恵に偶然的な依存を續けてゐる限り權力の基礎は堅固なものたり得ず、又、生の不和を克服するものとしての權力は、生の不和の重要な動機である生の困窮そのものを克服する秩序をもつ事なしには、十分にその眞價を發揮し得ないであらうからである。かくてゲゼルンクはその政策的活動をグマインシャフトやマハトシャフトに關するものに限らず、新しい政治の領域として、欲求と充足を持続的調和に冀す事により、生の困窮の克服に立ち向ふ。こゝに經濟への構成が成立する端初があるのであつて、この意味に於てゲゼルンクとしての共同體が指導する權力家計 (Machthabak)こそ、あらゆる經濟の胚細胞と云はなければならぬ。此の様な胚細胞から、漸次經濟が廣範圍に發展してゆくのであつて、既に定住生活によつて農耕を營んでゐる「家」もやがて經濟への構成を行ひはじめる。かくて經濟はその發展過程に於ていはゞ上から下へ降りて來たと云ひ得るであらう。²³⁾

前述の如く、欲求とは意欲の充足に役立つものを支配下に置かんとする要求である。従つて欲求に於ける思惟は、又、之を支配 (Verfügen) に於ける思惟と云ふ事も出来る。しかるに客體に對する支配が現實化するのも、やはりマハトシャフトへの構成が主體—客體—主體の三角關係に規制を加へる事より生ずるのである。²⁴⁾

グマインシュクの内部に於ては眞の意味に於ての客體に對する支配は存せず。客體は我々群の客體として唯占取 (Besitz) され使用される (verwenden) にすぎない。即ち我々群の客體は、對外的には他の我々群の使用が峻拒され、對内的には成員の事實上の占有 (Besitz) が見られるのみであつて、誰が何をどの程度に於て使用し得るかといふ事は内面的一致の精神に基づく風習によつて規制されてゐるに止る。しかるにマハトシャフトへの構成が強制

23) Ibid., S. 84-85.

24) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 1328 ff.

と自由の持續的調和の精神に於て主體—客體—主體の三角關係に干渉を加へると、客體の占取はそれに對する支配の意味を獲得する。即ち一方に於ては私有財産が——一定の客體を一定の主體に法的に歸屬せしめ他の主體にその占取の斷念を強制する事によつて成立するところの——他方に於ては共有財産が——それに對して人々は他の意欲の占取をも認容しなければならないところの——成立する。かくして今やその時々々の占取の背後には構成的に保證された正當な權利が固着してゐるのであつて、主體—客體—主體の關係は意識的法的に規制される事になる。かくの如き所有關係の法的な秩序付けによつて、構成體間の欲求充足過程として最も重要な意義を有する「交換」といふ創造的概念も順調に成熟するのである。

かくの如くマハトシャフトへの構成が主體—客體—主體の關係に干渉する事によつて、欲求に於ける思惟が成立すると共に客體の支配に關する秩序が與へられ、以て共同體及び家に第三のそして終結的な經濟への構成がつけ加はる。ゲマイヌクはマハトシャフトへの構成によつてその範圍を外延的に擴張されるのであるが、經濟への構成はその範圍の内部に於て、欲求と充足の持續的調和の精神に基き、體驗される生起を持續と存立へ統合するのである。マハトシャフトへの構成を粗放的(*extensiv*)と云ふならば、經濟への構成は集約的(*intensiv*)といふ事が出来るであらう。²⁶⁾經濟への構成によつて生ずる構成體をヴァルトゥンク(*Wirtung*)、²⁷⁾ヴァルトゥンクに附屬する群を給養群(*Versorgungsgruppe*)と呼ぶ。

經濟への構成に關する以上の如きゴットルの所説に體しては、ゴットルが經濟への構成を人間共同生活の終結的構成として社會の成立に後行せしめるのに對し、經濟こそ人間共同生活にとつて最も始源的且根本的な意味をもつものではないか、ケゼルンクの成立の後に經濟が構成されるのではなく、却つて經濟への構成の爲にケゼルンクが成立するのではないか、といふ批判が存する。²⁸⁾此の見解の相違は、同じ經濟といふ言葉によつて兩者の意味せしめる所が異なる事から生ずる、いはば言葉の問題だとも或る程

25) Ibid., S. 995, ff.

26) Ibid., S. 1335.

27) Ibid., S. 1342.

28) 福井教授著、『經濟と社會』125頁以下。

度云ひ得ようが、又それ以上の問題でもある。人間の諸行爲のうち最も基礎的な意味を經濟に求める經濟上位説に對し、最近の全體主義的見解が政治の經濟に對する根本的制約性を説く事は周知の通りであるが、ゴツトルはみづからの理論の中にナチス的思想をとり入れる以前から既に、經濟への構成がマハトシャフトへの構成を媒介として成立する事を強調してゐるのであつて、此の事は少くとも經濟の成立に關しては政治の經濟に對する原本的優位性が彼によつて認められてゐるといふ事を意味する。

扱以上の如き順序と關聯をもつて成立した人間共同生活の三つの部分構成は、一旦三つとも成立してしまつて後は、究極の實在としての生の現實態に不可分一體的に統合されて存在するのであつて、例へば民族協同體、國家及び民族經濟といふ三者は、常に唯一つの共同體(Gemeinwesen)といふ究極の實在に於て切り離す事の出来ない結合關係にある。しかも三者のうち民族協同體が最も基礎的な構成として、國家及び民族經濟は民族協同體の生活力(Lebenskraft)を高める事を以て究極の目的とするのである。とは云へ國家及び民族經濟は唯民族協同體の爲の手段としてそれに從屬するのではなく、夫々獨自の精神に於て自主的にみづからの構成を行ふのであつて、こゝに三者が本質的な關聯を被つて相互に疏外する危險に陥る可能性も存する。かくの如くそれらの構成に一應の獨立性を許しつゝしかも最高の目的の爲にそれらを統一すべき究極の最も重い責任を荷ふものは、外ならぬ公的權力である。即ち「衝擊力としてのこの公的權力によつて、かくも本質的に他を求め合ふもの、すなはち正に民族・國家及び民族經濟がその本質に反して互ひに分離するといふ危險をば、目的を意識して阻止する事が國家の崇高な使命となる」³⁰⁾。即ち、民族協同體と民族經濟との理念的關聯は、民族經濟が欲求と充足との持續的調和の精神に於ける構成を通じて民族協同體の生活重力を高める事によつてそれに奉仕する事にあるが、民族經濟が盲目的に企業營利を神聖化するならば兩者の理念的關聯は失はれ、民族經濟は「商業主義」の罪に陥る事になる。³¹⁾而して民族經濟をしてかゝる危險に陥らしめる事なく、常に民族協同體との理念的關聯を保たしめる

29) 酒枝教授著、『構成理論的經濟學』246頁以下。

30) Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft. 1933 S. 100-101 邦譯 岩波版、176頁。

31) Ibid., S. 99-100 邦譯 174頁。

事こそ、國家の使命といふ事になるのである。

前述の如く經濟への構成はその成立の過程に於てマハトシャフトを媒介としてゲマインシャフトに結びついたのであつた。而して今や明らかである如く、經濟への構成は、その成立の後に於ても亦、マハトシャフトに媒介されてゲマインシャフトに結びつくのである。ゴットルに於ける三つの部分構成は、かくの如き根本的關聯に於てあると思はれるのである。

三 經濟に於ける社會關係

前節に於て私は經濟への構成が他の二つの部分構成と如何なる關聯に立つものであるか、即ち經濟の人生に於ける位置についてのゴットルの所説を見て來たのであるが、次に、經濟への構成が、それ自體の内部に於て、如何なる社會關係を通じて行はれるものであるかといふ事について彼の述べてゐる所を伺はなければならない。

ゴットルによれば、經濟の理念は、包括構成體自體に則して³²⁾もなく、その内部の何等かの在內構成體自身に於て³³⁾もなく、唯兩者の相關活動を通じてのみ實現されるのであるから、經濟に於ける社會關係の問題にとつては、此の兩者が如何なる獨自の包括被包括 (Ineinander) の關係に於てあるか³⁴⁾最も重要な意味を持つてゐるのである。従つて一定の經濟秩序に本質的特徴を與へるのも、先づ以てその秩序が如何なる獨自の關係を通じて多くの構成體から構築されてゐるかといふ事に外ならないのである。³⁵⁾ところで包括構成體への構成には三つの意味深い規制がはたらいてゐるのであつて、それによつて確固たる實在性を有つより高次の構成體への構成が行はれる。慣習規制 (Branchegehung) 自己規制 (Selbstregelung) 指導規制 (Leitregelung) が即ち之であつて、三者のうちいづれ

32) Bedarf und Deckung, 1928, S. 91.

33) Ibid., S. 87.

34) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 476.

35) Volk Staat, Wirtschaft und Recht. S. 80. 邦譯 III頁。

が支配的であるかによつて、經濟形態が歴史的に特徴付けられるのである。³⁴⁾

社會的構成體の各々は自らの存活を目覺して固有構成 (Eigengestaltung) を行ふのであつて、之を經濟への構成に則して云へば經濟する (wirtschaften) のであるが、此の様な構成的働きの全體を共同生活の立場から見ると、之をその行為規制 (Tatessung) と呼ぶ。³⁵⁾ 行為規制には異つた種類の二つの規制が先立ち、いはゞそれに對して豫備的な仕事をする。即ち慣習規制と自己規制とであつて、兩者は協同して共同生活の自働的構成 (Selbstgestaltung) を生み出す。之は行為規制をして干與せしめる爲の、構成された下層建築を提供するものであつて、經濟そのものが自働的に構成され、ばされるほど、益々經濟する事は容易となり、經濟的考量も簡單に行はれるのである。

先づ慣習規制についてであるが、風俗慣習が共同生活に於て演ずる役割は決して過大視される懼れないものであつて、經濟者が固有構成を行ふ場合にも、從來、長らく行はれて來た慣習の通りに行ふ事が非常に多い。此の様に慣習に執着する事もただちに理性と矛盾するものでは決してない。けだし「誤れる秩序は長續きはしない」³⁶⁾のであるから、風俗慣習の平均的な内容を「共同生活の生成せる理性」³⁷⁾と呼び得るであらうから。慣習規制が支配的なのは經濟生活が未だ簡單に脅まれてゐる時代に於てであるが、今日に於てもそれは公的家計や私的家計の構成に對して重要な意義を持つてゐるのである。³⁸⁾

共同生活の複雑さが増大すると、慣習規制に代つて自己規制がますます³⁹⁾多くその自働的構成にあづかるやうになるのであつて、現在の國民經濟に於てはこの自己規制が支配的である。自己規制は、多くの體驗された生起が他の生起との交互作用によつて全くおのづから持續と存立への生起の統合に貢獻するやうに動く事によつて生ずるのであつて、それは、いはば「理性の狡猾」によつて、全く意欲されなかつたよい結果をもたらすのである。⁴⁰⁾この自己規制の最も大規模な且つ最も好適の例は近代國民經濟の所謂「アウトマチスムス」である。近代國民經濟の經濟秩序は「企業營利の支配下にある流通經濟」として特色付ける事が出来るが、そこに於ては、經濟生

36) Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft S. 86. 邦譯、145頁。

37) Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. S. 82, 邦譯、120頁。

38) Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft. S. 84-85. 邦譯、148-149頁。

39) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 977. Gottl; Der Myths der Planwirtschaft

活の主導者が最大の収益をめざす企業に委ねられて居りながら、交換を通じての價格機構によつて、全く自然的に國民經濟の欲求と充足の持續的調和が行はれてゐるのである。⁴⁰⁾

採慣習規制と自己規制は行爲規制に下層建築を提供するのであるが、この行爲規制の上に尙上層建築が位する。即ち包括構成體の行爲規制は在內構成體の固有構成に働きかけてその範圍を強制的に縮少し、以て包括構成體の立場から欲求と充足の持續的調和をヨリよく確得せんとするのである。指導規制とよばれるものは即ち之であつて、それは行爲としての經濟的政策に外ならない。

指導規制はいろいろに分類する事が出来るのであるが、最も重要な區別は、生活の隣接から本來必然に發生する自生的 (Godesandig) 指導規制と經濟生活の生成過程に即應して生ずる臨機的 (fallweise) なそれとの區別である。⁴¹⁾

前者のうち最も重要なのは、諸構成體の政治的な生活の隣接から、即ちマハトシャフト的な包括構成體に對する在內構成體の共同の影響から生ずる強制經濟であるが、このやうな強制經濟を構成的に保證する爲に「公財政」が構成される。それは協同經濟的 (Gemeinwirtschaftlich) な目的構成體として、市場の如き相互經濟的 (wechselwirtschaftlich) 目的構成體に對照せしめられる。國家權力は公財政から出でて爾餘の在內構成體に及ぶのであつて、この意味に於て公財政は他の一切の在內構成體の上に位するところの「核心的な在內構成體」としての役割を強力に演ずる。この種の指導規制は人間共同生活から全く不可分のものであつて、その本質上生活必然的なものである。しかもそれは自己規制と矛盾するものではなく却つてその不可缺の基礎たるべきものである。けれど、例へば資本主義經濟の如く自己規制の支配下にある經濟生活に於ても國家と法がその確實なる支柱とならなければ

1932, S. 19, 邦譯 54頁。

40) Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. S. 87. 邦譯 121-122頁。

41) Bedarf und Deckung S. 88.

42) Gottl; Der Myths der Planwirtschaft. S. 15-18. 邦譯, 47-52頁。

ならないからである。

自生的指導規制が必然的なるに對し、臨機的指導規制は合目的なものである。それは經濟生活の歴史的變遷過程に應じて隨時行はれるのであるが、過去に於ける最も顯著な實例は、國家があらゆる強制干與を以て資本主義的産業の生成過程の背面を擁護し、企業營利の教育者たらんとした重商主義政策と、經濟生活の自己規制の進展に途を拓く爲に新しい經濟に對する古い妨害物や後に生じた支持物を清掃する爲の「逆符號の」(im verkehrten Vorzeichen)強制經濟とである。しかるにまた、十九世紀の後半以來經濟生活は一方漸次慢性的な危機に陥りゆくと共に、他方時に全く尖鋭的な危機にも直面せざるを得なくなつて來た。前者については、經濟的全聯關の非常な錯綜に伴つて、經濟生活の見透しが困難となると同時にその圓滑な運動が行はれ難くなる結果でもあるが、更に重要な事は國民經濟の内部に醸成されてゆく階級分裂である。後者が景氣變動に伴ふ恐慌の災禍である事は云ふ迄もないであらう。この二つの問題に關して、自己規制は再び指導規制に救授を求める。従つて現在の經濟的政策(ökonomische Politik)は景氣政策を中軸とするところの經濟政策(Wirtschaftspolitik)と社會政策とに分れる。⁴⁴⁾特に社會政策はわれ／＼の生活にとつて最も重要な意義を持つのであつて、それは「あらゆる經濟的政策のうちの女王」⁴⁵⁾とも云はるべきものである。

指導規制の役割はかくの如く再び増大しつつあるが、此の傾向はしかし指導規制がやがては自己規制にとつて代るものたるべきことを意味するものでは決してない。指導規制は「その固有なる意味を、つねに自己規制の相手役として登場する事によつてのみ保持し(得るのであつて)、指導規制の干與に對して自己規制は動かざる前提を提供するのである」⁴⁶⁾。この意味に於て「指導規制に對しては夫々の與へられた時點に於て、動かざる上方限界

43) Ibid., S. 29 ff. 邦譯、71頁以下。

44) Wirtschaft und Wissenschaft. S. 485.

45) Der Mythos der Planwirtschaft. S. 27, 邦譯、67-68頁。

46) Ibid., S. 100, 邦譯 193頁。

が刪されてゐる」と云はなければならぬ。もし此の様な限界を越えて、指導規制が自己規制の單なる調整者 (Regulator) に止まる事なく、自己規制の改革者 (Reformer) として新しき經濟秩序を打ち建てんとするならば、經濟生活は言ふべからざる混亂に陥るであらう。⁴⁷⁾ 經濟秩序の人為的變革は危険であるのみならず全く不必要である。けだし、今日の經濟が指導規制を益々多く希求する如き運動の方向は、一定の限度に達するとその方向を逆轉し、經濟生活は再びヨリ以上見透し得るもの、活動的なもの、乖離を脱したものとなり、理性の強制により從來より高められ來つた強制經濟が再び減退するといふ可能性は、「全然疑ふべくもない」⁴⁸⁾のであるから。生活必然的な乃至は調整者としての指導規制の意義までも否定して、自己規制の萬能を信ずる事も自由主義的偏見であるが、自己規制を根本的に變革して指導規制の徹底による經濟の統一的計畫的運營を謳歌する事も亦ボルシェヴィズムの誤謬である。われわれは指導規制のもつ正當な意義を限界とを併せ認識しなければならぬ。

經濟への構成の内部に於ける構成體相互の關係について、ゴットルの述べてゐるところは大體以上の如くである。さきにわれわれは、ゴットルに於ける經濟がマハトシャフトに媒介される事によつてゲマインシャフトに連つてゐる事を見たのであるが、本節に於て明らかにされた如く、經濟の内部に於ても、マハトシャフトは公財政を通じて「生活必然的」に働きかけてゐるのであつて、公財政は國民經濟の「中核的」構成體として他の在內構成體に強制作用を及ぼし、恰かも市場が交換的相互經濟の中心である如く、協同經濟の構成を中心的に指導するのである。しかも更に相互經濟そのものに對しても公權を背景に持つ經濟的政策が隨時合目的な干渉を加へ、經濟への構成をヨリよく行はんが爲に活動する。かゝる意味に於てマハトシャフトへの構成は、經濟への構成そのものを、権力的強制力によつて統制してゐると云はなければならぬ。

47) Ibid., S. S. 100 邦譯、192頁。

48) Ibid., S. 77. 邦譯、153頁。

49) Ibid., S. 99. 邦譯、190頁。

この様な經濟内部における権力的強制は、しかし時代によつてその重要性を變化せしめる。古代や中世に於ては指導規制が支配的であつたが、近世初頭自己規制が指導規制によつて自己發展の進路を與へられてからは、經濟生活は主として自己規制によつて營まれる事になり、指導規制は自己規制の補助的役割を有するにすぎなくなる。今や經濟への構成は在內構成體が交換關係を通じて行ふ相互經濟によつて、欲求と充足との持續的調和といふ理念を實現するのであり、従つて又おのづからダメインシャフトの生活濟を高める所以ともなるのであるから、經濟とダメインシャフトを媒介するマハトシャフトの役割は、經濟の自己規制を扶助乃至支持して、之にその十全の機能を發揮せしめるにあると云へよう。強制と自由との持續的調和といふ精神は、今やそれが本來有するところの、強制的爲の自由といふ意味を失つて、逆に、自由の爲の強制——この場合の自由が主として企業營利の自由を意味する事は云ふ迄もない——といふ意味に於て解されなければならないのである。

以上の如きゴットルの所説は、彼がナチス的思想をその理論の中に攝取して以來、かなりの變化を受けた様に見える。即ち「民族・國家・經濟・法律」⁵¹⁾に於ては、自己規制がもはや困難な課題を解決する事が出来なくなり、指導規制が難局の打解に當る事によつて主要な規制 (vorherrschende Regelung) に上り得る事あるを指摘し、之に呼應して同じ書物の中に、「存在上正しいものに關する判斷」のより高次の形態としての「生活上正しいものに關する判斷」の可能性を新たに主張し、指導規制に理論的某礎付けを與へてゐるのであるが、更に最近の「經濟政策と理論」に至つては、民族の經濟生活は、當該民族の生活の究極且最高の指導に任ずる政治と密接不可分の關係にあるのであつて、今やナチス的世界觀に規定された政治の強力な指導によつて、經濟への構成が直接民族協同體に奉仕しなければならない事が力説され、その爲の經濟政策の指導として、或は「公益の私益に對する優先」が、或は「勞働の資本に對する優先」が掲げられてゐるのである。⁵⁴⁾

この様な政治の經濟に對する優位の主張は、はたして自己規制の性格が指導規制によつて根本的に變化せしめられ、國民經濟を統一的に運營する新しい經濟秩序が招來さるべき事を意味するであらうか。ゴットルによれば在內構成體が自己の生活を確保せん

50) Ibid., S. 19, 邦譯, 53-54頁, Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. S. 194 邦譯 274頁

51) Gottl は本書の Vorwort に於て自分の學說が國民社會主義的思想により「一貫した深化を蒙つた」と述べてゐる。

52) Volk, Staat, Wirtschaft und Recht. S. 87. 邦譯 122頁。

とするそれ自身正當な私益 (Eigenwohl) の追求と、他の構成體の犧牲に於て行はれる私欲 (Eigensucht) の追求とは區別されなければならぬ。⁵⁵⁾後者が無條件的に生活違反的であつて嚴に斥けられなければならない事は云ふ迄もないが、前者は通常公益と完全に一致する。ただし包括構成體とは在內構成體とは意味深い構成結合性に於て互に他を生かし合ふ關係に立つてゐるのであるから。従つて例へばそれ自身の私益の爲に行はれた企業の繁榮は原理上直ちに民族經濟乃至民族協同體の繁榮に通ずるのである。しかるに例外的に私益と公益とが相反する場合もないではないのであつて、この場合には政治的指導が、企業の私益追求を制限し、之を「ストツプ」せしめんとするに至る。「公益優先」といふ標語は、正にこの事實を意味するのである。又「勞働の資本に對する優先」も決して個々の企業家の個性的自由や、「資本家達の主動權」を否認するものではなく、之等は却つて正當な私益の追求として、經濟生活運営の不可欠の楨杆として認めらるべきものである。⁶⁵⁾

かくの如きゴツトルの所説に鑑みるならば、經濟政策の指導性がいかに強く主張されようとも、それは決して自己規制に對する根本的な不信任を意味するものでない事は明らかであると思ふ。そこに於ては唯、自己規制の「上層建築」としての指導規制が從來に比してより強力且廣範圍に說かれてゐるにすぎない。換言すれば經濟をデマインシャフトに媒介するものとしてのマハトシャフトの役割が、ゴツトルの意味に於て再び強く前面に押出されて來たに止まるのである。

六 結 言

以上私はゴツトルに於ける經濟と社會の問題について、經濟と社會が如何なる根本的關聯に於てあるか、又、經濟に於ける社會が如何なる本質的構造を有するか、についての彼の所説を跡付けて來たのである。我々はこの様な所説の中に、ドイツ歴史學派の傳統が脈々と流れてゐる事を明白に看取する事が出來ないであらうか。

53) Ibid., S. 138, ff. 邦譯、194頁以下。
54) Wirtschaftspolitik und Theorie S. 133, ff. 172, ff.
55) Ibid., S. 150, ff.
56) Ibid., S. 193-196.